武蔵国分寺遺跡発掘調査概報

I

(株)竹中工務店国分寺社員寮
建設予定地試掘調査報告書

1976年6月

国分寺市教育委員会
武蔵国分寺遺跡調査会

序

武蔵国分寺は、その伽藍の主要部を台脚におき、台上を含め広大な地域を寺地として創建された。元来、この台上は縄文時代から居住適地として使用され、多くの遺跡をのこしているし、すでに縄文に先がける先土器時代の遺物も発見されている。

竹中工務店によりその社員寮の建設が予定されている地は、これらすべての遺物を出土する区域であるため、同社の好意により遺構の概観を得るための調査を実施した。その結果は、予想の通りの遺構・遺物の存在することを確認することができた。これらは過去の人の足跡を知る上に重要なものであることは当然であるが、殊に奈良・平安時代の国分寺最盛期を語る資料として貴重なものである。

武蔵国分寺は、全国的にみて最大の規模をもった国分寺であるが、最近の市街地化の急速な波のため遺構の破壊されるものも多く、その全貌をとらえることに困難を感じている。従って、予備調査によって知り得たこの地の調査を国分寺解明の一助とするため、本格的調査を実施することを調査団一同、念願している。

本書刊行に当り、関係各位に深謝するものである。

昭和５１年６月

滝　口　　宏

例　　言

1. 本冊子は、武蔵国分寺遺跡調査会が株式会社竹中工務店の委託を受けて実施した、同社々員寮建設予定地（国分寺市西元町一丁目2448−3・5）の試掘調査報告で、武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅰとして発行するものである。
2. 現場に於ける調査は、昭和５１年４月２日より５月２９日にかけて実施し、その後６月３０日まで出土遺物等の整理を行った。

   なお、出土遺物等についての詳細は、本調査の報告と併せて記述する予定である。
3. 本書は、滝口宏団長を中心として、調査団全員の討議の上、有吉、福田の二名が主に分担執筆したものである。
4. 遺構標示は、本文執筆の便宜上、仮に番号を付したもので、本調査にあたっては、あらためて正式登録する予定である。
5. 出土遺物の図版に於て、その縮尺は全て$\frac{1}{2}$に統一した。
6. 調査に際しては、下記の方々の協力があった。記して深謝したい。

<調査補助員>

魚田比佐志・清水隆博・成田昭

<発掘作業員>

市川平次・小野寺誠・大森斎・川端謙一郎・桜井捨次郎・佐藤一幸・沢井峰一・高品菱吉・高橋金作・富沢栄・夏目都美男・淵上祐二・船渡亀吉・増田盛三・松沢純一・村上和生・吉田忠一・吉弘大太郎

<整理作業員>

岡ミサオ・斎藤さだ子・永沢昭子・山口啓子

株式会社東和植物園、同社　木村伸・大岩国男・原川大治良

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 7

Ⅱ　調査地区の概観 …… 10

1.　調査地区の位置と地理的環境

2.　歴史的環境

3.　発掘区の設定

4.　層　序

Ⅲ　調査日誌 …… 14

Ⅳ　検出遺構と出土遺物の概要 …… 16

1.　先土器時代

2.　縄文時代

3.　奈良・平安時代

Ⅴ　総　　括 …… 20

挿　図　目　次

第1図　発掘区の呼称

第2図　層　序

第3図　発掘した深さ、および検出遺構全体図

図　版　目　次

巻首図版 1.　遺跡の位置

巻首図版 2.　調査地区の位置

図　版 1.　1.　発掘状況　東から

2.　発掘状況　南から

〃　2.　1.　ＦＬ６６区西壁土層断面

2.　発掘区全景　東から

〃　3.　1.　１・２号住居跡　東から

2.　３・４号住居跡　南から

〃　4.　1.　１号溝跡と１号特殊遺構　東から

2.　２号溝跡　東から

〃　5.　1.　ＦＬ７３～７７検出遺構　東から

2.　ＦＪ８３検出遺構　東から

〃　6.　1.　先土器時代の遺物

2.　縄文時代の遺物：土器

〃　7.　縄文時代の遺物：土器

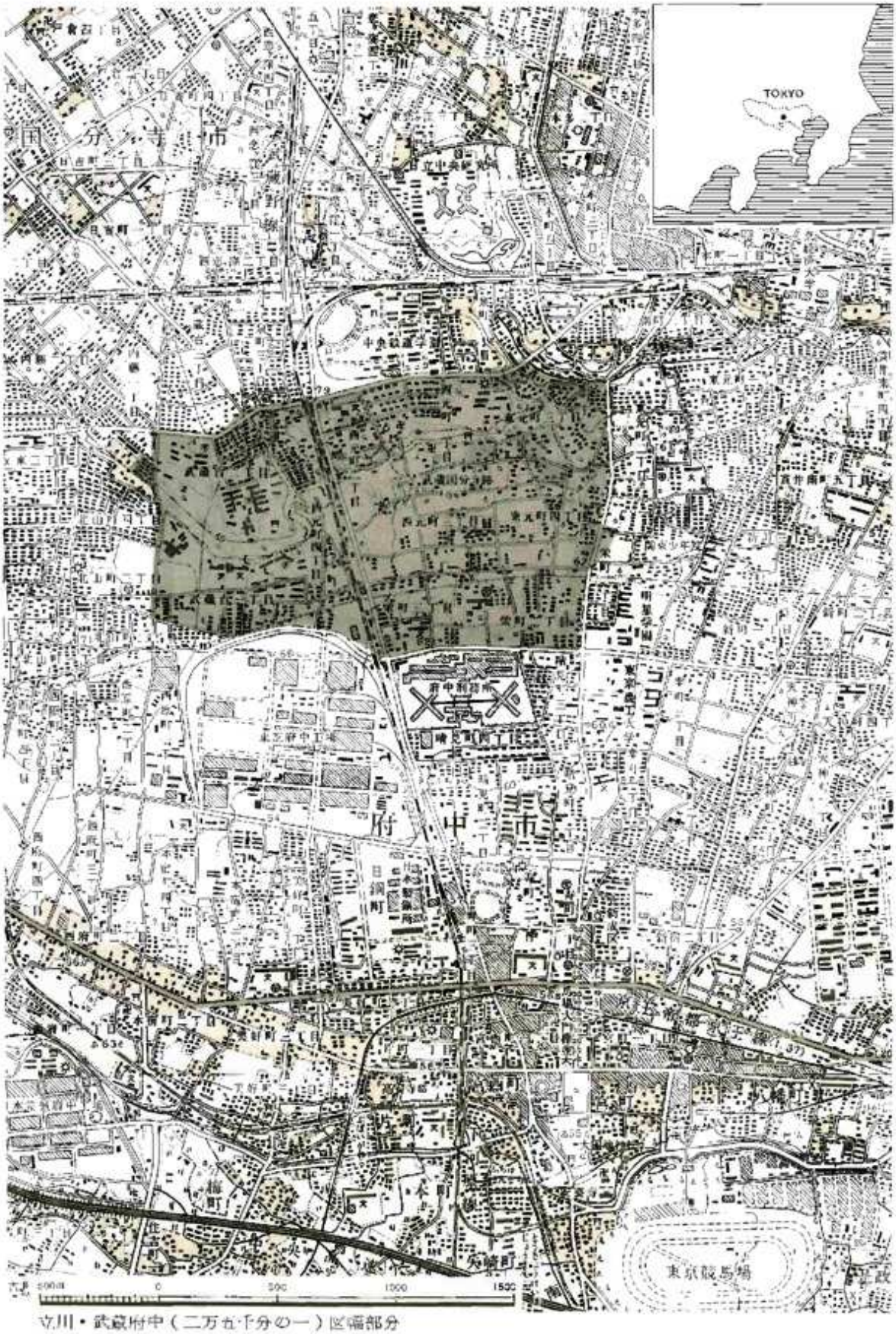
〃　8.　縄文時代の遺物：石斧

〃　9.　縄文時代の遺物：磨石，スタンプ状石器

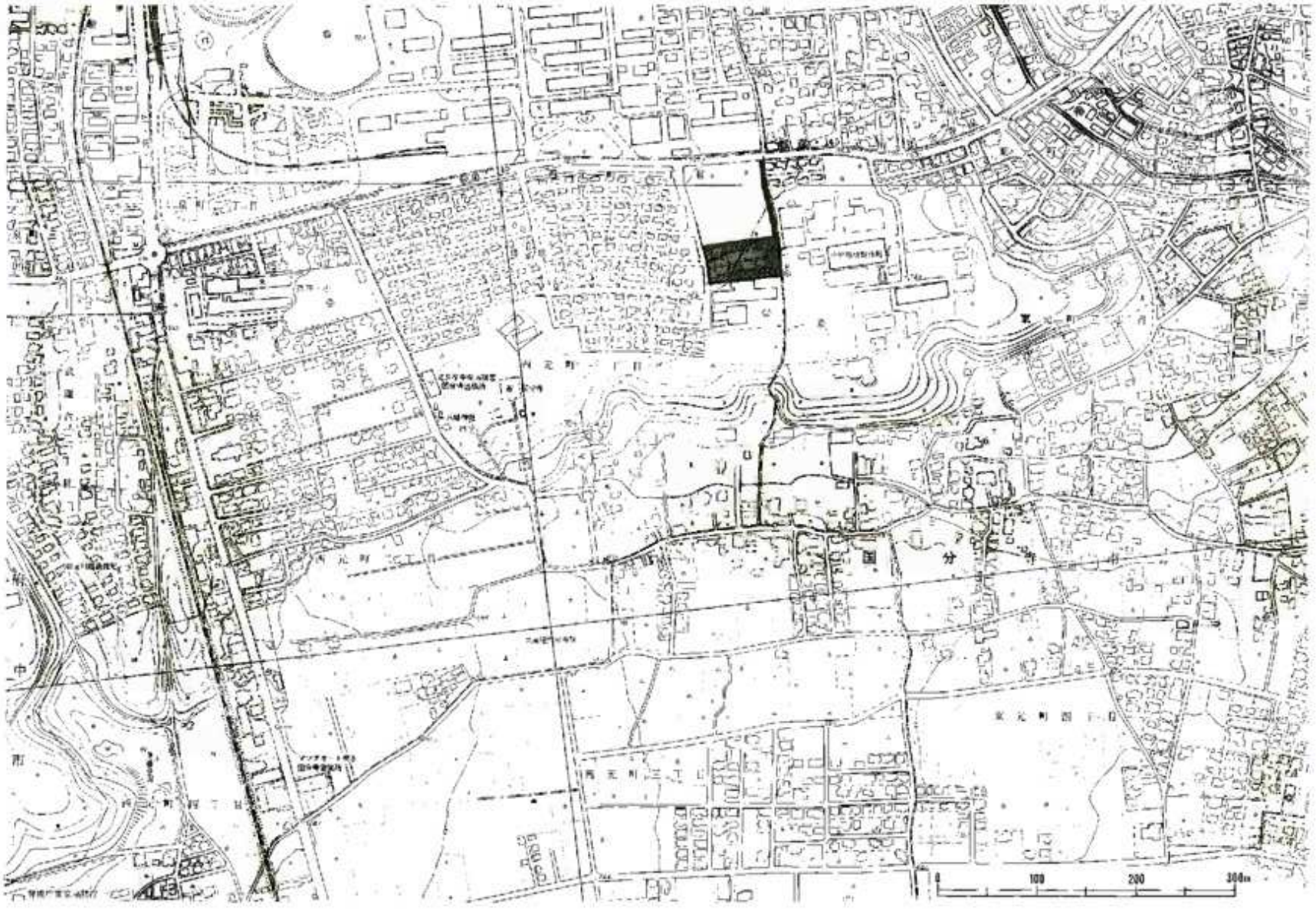
〃　10.　奈良・平安時代の遺物：須恵器坏，土師器坏，文字瓦「大」

〃　11.　奈良・平安時代の遺物：平瓦，丸瓦

巻首図版一　遺跡の位置（網部分）



立川・武蔵府中（二万五千分の一）区画部分



巻首図版２　調査地区の位置（網部分）　1/6,000

Ⅰ　調査に至る経過

史跡武蔵国分寺北側台地上の西元町一丁目に竹中工務店の社員寮が計画され、昭和４９年８月埋蔵文化財発掘届により、その内容が国分寺市教育委員会に示されるにいたった。

国分寺市教育委員会では、これまでの武蔵国分寺跡周辺の調査および４８年以来の土木工事立会い調査の結果などから、寮建設に先立って敷地全面を対象として発掘調査を実施すること、重要遺構等が発見された場合は、緑地等にかんがみて極力遺構の保存を計ること、調査は、武蔵国分寺跡の一地点であることなどから、現在話しを進めている恒久的組織である国分寺遺跡調査会の設立をまって実施することなどを示し、その際、竹中工務店側からは、全面的な協力の申し入れと、調査の早期実施について要望が出された。

昭和４９年１０月、リオン株式会社の厚生会館建設に伴なう緊急調査により、調査会成立の気運が高まり、同年１１月、武蔵国分寺遺跡調査会が正式発足した。５０年４月、調査会５０年度事業計画の中で再び竹中工務店寮建設予定地の調査が討議されたが、発足後のまもない諸般の事情から、調査計画は見送られるにいたった。５１年３月、再び５１年度事業計画として調査会に調査計画が示されるにいたったが、昭和４８年以来の経過および、まだ十分と言えないまでも調査体制が整うことなどから、まず試掘調査を実施し、その結果をふまえて本調査の実施については、再度協議することで承認を得られるにいたった。

この間、試掘調査の実施にあたり、東京都教育委員会、国分寺市教育委員会、竹中工務店の三者で協議を行ない、４月１日に国分寺市教育委員会と竹中工務店の二者間で、覚書きを取りかわし、４月２日より５月２９日まで試掘調査を

実施した。

覚　　書

東京都国分寺市教育委員会（以下「甲」という。）と株式会社竹中工務店（以下「乙」という。）とは、乙が施工する社員寮建設工事（以下「工事」という。）に伴う埋蔵文化財包蔵地（東京都国分寺市西元町一丁目２４４８－３，５）の取扱いについて、甲乙協議の結果、下記のとおり覚書を交換する。

記

1.　試掘調査の実施

乙は、乙が施工する工事に伴う埋蔵文化財包蔵地に係る埋蔵文化財の内容（種類、性格、員数、分布等）を把握し、文化財保護上必要な措置をとる為の資料を得る目的において試掘調査を実施するものとする。

2.　工事設計に関する意見聴取及び協議

乙は、乙が施工する工事の設計（建造物の規模、構造、位置等）に関して、試掘調査終了後甲の意見を聴取し、甲と協議のうえ実施するものとする。

3.　試掘調査

(1)　試掘調査は、乙が武蔵国分寺遺跡調査会に委託して実施するものとする。

(2)　試掘調査は、現場における発掘作業ならびに整理作業を終

えたのち、試掘調査報告書が乙に提出された日をもつて完了するものとする。

(3) 試掘調査の期間、費用等については、委託契約中において定めるものとする。

4. 本調査

本調査は、試掘調査終了後甲乙協議のうえ実施するものとする。

5. 出土品の取扱い

発掘された出土品について、乙は文化財保護法の趣旨にかんがみ、乙に帰属する出土品に関する権利を放棄し甲に譲渡するものとする。

6. この覚書に定めのない事項及び疑義を生じた事項については、その都度甲と乙は協議するものとする。

以上の覚書の証として本書二通を作成し、甲・乙捺印のうえ、各自一通を保有するものとする。

昭和５１年４月１日

甲　東京都国分寺市教育委員会
教育長　渡　辺　保　一

乙　株式会社　竹中工務店
東京都千代田区神田錦町一丁目九番地の一
株式会社　竹中工務店東京支店
支店長　小笠原　平一郎

Ⅱ　調査地区の概観

1.　調査地区の位置と地理的環境（巻首図版１・２）

調査地区は、国分寺市西元町一丁目２４４８－３，５番地に所在する。東のリオン株式会社および西の郵政住宅と、共に広大な敷地の両者にはさまれた一画で、東西に走る都道１４５号　立川・国分寺線とは南北約７０ｍ巾の山林を介在して連なる。南は三和銀行国分寺寮と隣接する。

調査地区は武蔵野段丘上に立地する。武蔵国分寺跡の主要部分が立地する立川段丘と該段丘を画する国分寺崖線までは僅か１００ｍほどである。崖線下では、随所に湧水がみられ、野川の支流を形成している。

また、調査地区より東へ約２００ｍほどいくと、野川の本流が形成した開析谷に出合い、これを更に上ると中央線国分寺駅に着く。調査地区はゆるやかな東傾斜をなし、海抜標高約７７ｍである。

2.　歴史的環境

立川段丘上にその主体を占める国分僧寺は、武蔵野段丘の縁辺をとりこんで寺域としており、現薬師堂下を通り，リオングランド西南隅にて南下する素掘溝が、その北限を画するものと滝口宏に拠り推定されている。本調査地区の南辺より南へ約９０ｍの位置になるものと推定される。

この溝の内外で、昭和２，３０年代に甲野勇氏等により竪穴住居跡の調査が行われ、段丘縁辺に於て約２０数軒ほど発見されている。

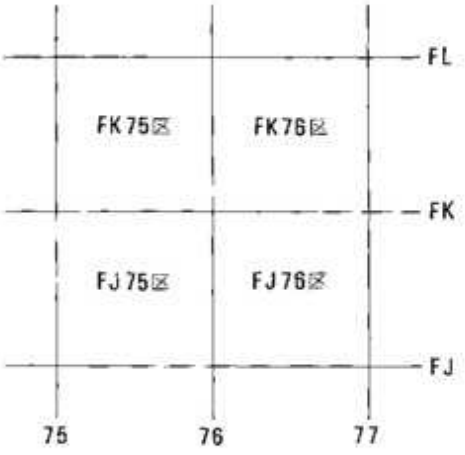
又、昭和４９年１０月には、隣接するリオン株式会社の北西隅敷地（厚生会館用地）に於て調査が行われ、平安時代に属する住居跡７軒、土坑５基等が検

出されている。

その他にも、都道１４５号立川・国分寺線下に於て、工事に伴う試掘調査によって竪穴住居跡の存在が確認されており、西の郵政住宅を併せて、武蔵野段丘上にも数多くの住居跡の存在が予想されるのである。これらの住居跡の分布、性格、変遷等は今後の課題であり、武蔵国分寺跡の変遷を語る上で、重要な部分を占めるものと思われる。

3. 発掘区の設定

国分僧寺堂宇中軸線を基準に、金・講堂の中間に設置した原点をもとに座標を設定してあるので、これをもとに発掘区を設定した。発掘区の呼称は、東西ラインに付した記号（ＦＪ・ＦＫ・ＦＬ・・・）と、南北ラインに付した記号 ７５・７６・７７・・・ の両者を用いて呼ぶ。即ち、３×３ｍの発掘区の南のラインがＦＪ、西のラインが７５であれば該区は「ＦＪ７５」区となる。（第１図参照）



第１図　発掘区の呼称

なお調査地区は原点より北へ３０５～３２０ｍ、東へ１９７～２０７ｍの範囲になる。対象面積は道路拡張分を含めて約3,３００m^2である。

発掘区は、３×３ｍのます目（グリッド）を基本として、６ｍの間隔をおいて東西に４本、更に２７ｍの間隔をおいて南北に２本のトレンチを

第３図のように設定した。この結果試掘調査の面積は約７８０m^2となった。

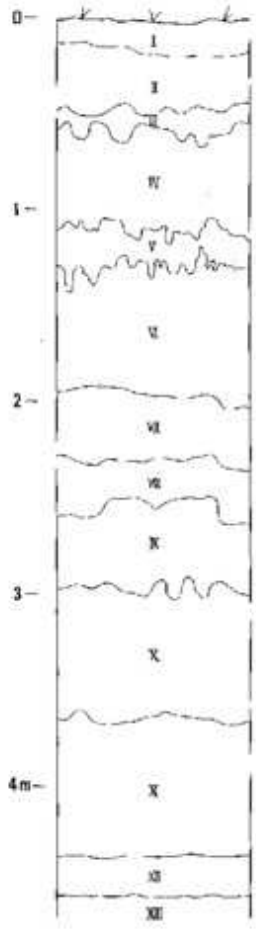
4. 層　序（図版２－１）

Ⅰ層：盛土　：砂利、コンクリートブロック、ロームより成る。層厚は２０～６０cm程で全体にみられた。

Ⅱ層：表土　：いわゆる耕作土で、乾燥するとパサパサしてくずれやすい。上部は削られた上、Ⅰ層がのる。

Ⅲ層：黒褐色土：粒子粗く、細かいローム粒を含む。北側では薄く（１０cm前後）、木の根等の攪乱を受けて残りが悪い。南側では２０～３０cmと厚い。奈良・平安時代の遺物を含む。

Ⅳ層：茶褐色土：いわゆるローム漸移層で、奈良・平安時代の遺構はこの面で検出が容易になる。上層より縄文時代の遺物が多く出土した。



第２図　層序（1/40）

Ⅴ層：暗黄褐色ローム：ソフトローム。軟質。Ⅳ層との境はやや不明瞭。縄文時代の遺構はこの面で検出が容易になる。

Ⅵ層：赤褐色ローム：ハードローム。硬質。細かいスコリア粒を多量に含む。

Ⅶ層：黄褐色ローム：赤色味を若干帯びる点と、締りにやや欠ける点でⅥ層と区分けした。ＦＲ６６区の該層より礫１点出土。

Ⅷ層：暗褐色ローム：スコリアの量は少ない。立川ロームの第一黒色帯であろう。Ⅹ層の第二黒色帯と比べて黒色味に欠ける。

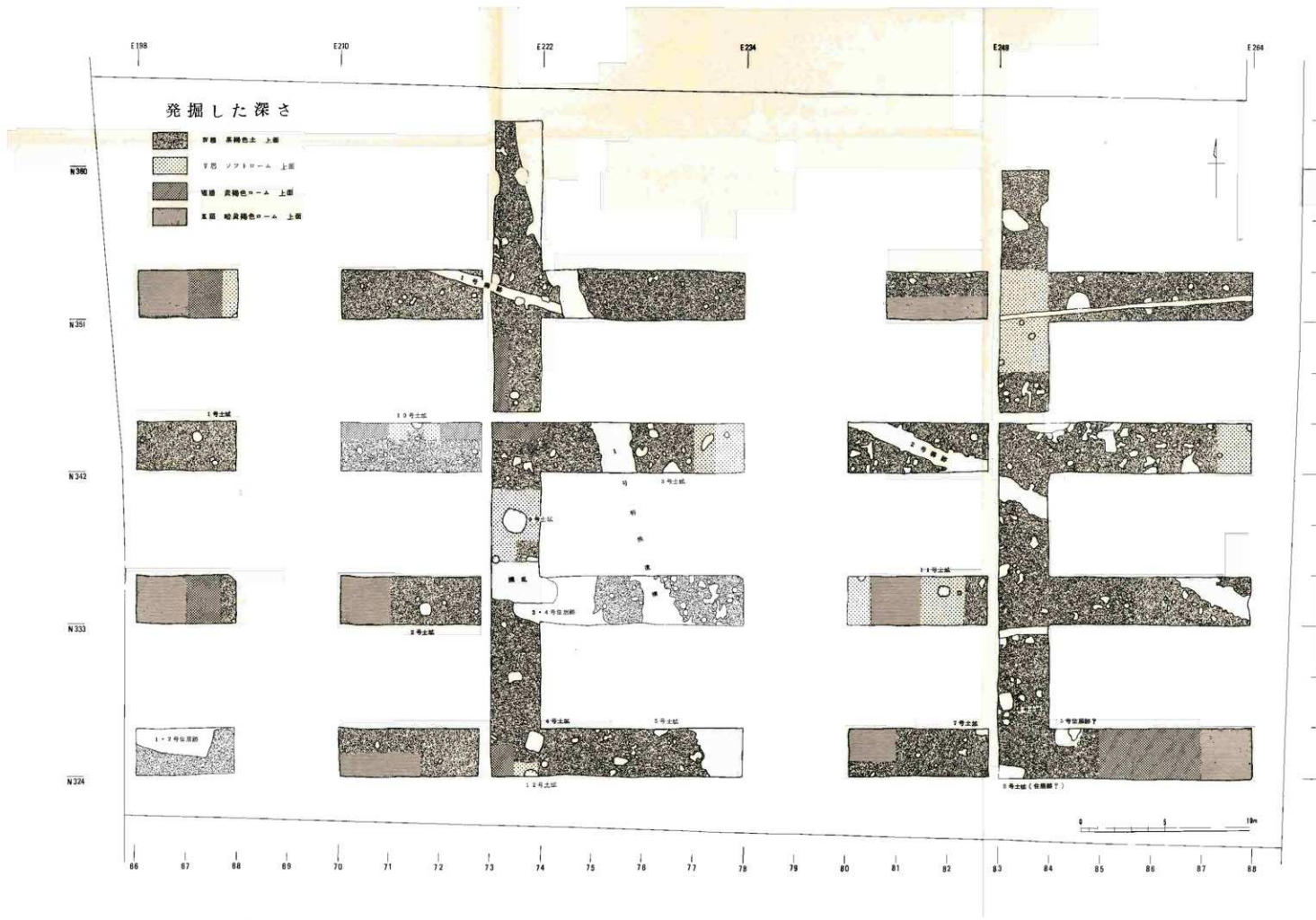
Ⅸ層：暗黄褐色ローム：白色味帯びる。Ⅹ層へは漸移的に移行する。

Ⅹ層：暗褐色ローム：立川ロームの第二黒色帯であろう。Ⅺ層との相違は明瞭に識別できる。

Ⅺ層：黄褐色ローム：以下XIII層まで成分等は同じと思われるが、締りの違い等で区分けした。細かいスコリア粒を多量に含み、粒子細かい。

XII層：黄褐色ローム：Ⅺ層より締りあり、部分的に固いブロックを含むことで分けた。

XIII層：黄褐色ローム：締りはⅺ層に同じであるが、粘性若干あり、スコリアの量は少ない。



第三図　発掘した深さおよび検出遺構全体図

Ⅲ 調 査 日 誌

4・2　測量基準点の移動。

4・7　発掘区設定の為の基本杭を打つ。

4・8　発掘区の縄張り実施。レベル原点を市立四小入口より移動。調査地区四隅に於て、層序確認のため試掘。表土の層厚は盛土を含めて40～60cm。

4・9　前日の試掘の結果より判断して、機械（ユンボ）を投入して表土の排除を開始。

4・10　午前10時頃ユンボの作業終了。西側より発掘作業員の手により、表土を排除し黒褐色土上面に於て遺構検出作業に入る。しかし、この面では遺構検出が困難なため、更に10～20cm程下げて茶褐色土上面にて遺構検出作業に入る。

4・12～4・20　遺構検出→写真撮影→平面実測→レベル記入及び土層断面の実測等を交互に実施しながら、全体にわたって奈良・平安時代の遺構検出作業を終える。

4・21～4・23　奈良・平安時代の遺構が検出されなかった部分をローム面まで掘り下げ、縄文時代の遺構検出作業に入る。

4・26　先土器時代の遺構検出のため、縄文時代の遺構が検出されなかった部分の掘り下げを開始。

5・11　奈良・平安時代の遺構面が乾燥してきたために、表面に約15cmほど土をかぶせる。

5・19　雨のため、出土遺物の水洗、註記作業を実施（以後数回）。

5・21　ＦＲ６６区第Ⅶ層中より礫出土。同面を広げたのち、更に約１５cm程ど掘り下げたが、他にはみえず。同層と思われる排土中より黒耀石剝片１点採集。

5・22　一部埋戻しに入る。

5・23　機械（ユンボ）にて埋戻しを実施。ＦＬ６６区Ｗ壁断面の実測。

5・29　ユンボによる埋戻し終了。これにて、現場に於る作業は完了。

Ⅳ　検出遺構と出土遺物の概要

1.　先土器時代

約１２ケ所、１１３.５m^2についてロームを掘り下げた。内４６m^2は第Ⅶ層上面まで、６７.５m^2は第Ⅸ層上面までに限定された。またＦＬ６６区に於ては断面観察のため、更に深掘りを行った。

この結果、①ＦＯ７０区第Ⅵ層中より炭化物が出土。

②ＦＲ６６区第Ⅶ層中より礫１点が出土。（図版６－１下）

③同区同層と思われる排土より黒耀石剝片１点が出土。

（図版６－１上）

以上の遺物等の性格究明は本調査に譲ることにして、調査を終了した。

2. 縄 文 時 代

a　検 出 遺 構

土壙４基の他、ピット数本が検出された。敷地全体にまばらに存在するものと思われる。

９号土壙　　ＦＭ・ＦＮ７３区に所在する。約1.５ｍ×1.５ｍの隅丸方形を呈す。

１０号土壙　ＦＯ７１区北壁隅に於て検出。円形土壙になるもので、東西幅が約０.８ｍを測る。

１１号土壙　ＦＬ８１区。約0.６×0.８ｍの円形。

１２号土壙　ＦＩ７３区。南東隅に於て検出。南側に延びる。

b　出 土 遺 物

遺物は敷地全体の表土、黒褐色土、茶褐色土中より出土した。

土器は、主として茶褐色土中より早期（撚糸文系・条痕文系）、茶褐色土上層より中期（勝坂式・加曽利E式）、後期（堀ノ内式）等が出土しており、この内、撚糸文系土器と加曽利E式土器の出土量が多い。（図版6－2，7）

石器は石斧が多く、他に磨石、石皿、スタンプ状石器等が出土している。（図版8，9）

3. 奈良・平安時代

a 検出遺構

確実なものとして住居跡4軒、溝跡2条、土壙8基、特殊遺構1ケ所がある。

また、全体にわたって、大小のピットが約200数個検出された。発掘の範囲が狭いこととと。上面よりの観察であったので、特にまとまりはみられなかったが、本調査にあたっては、充分精査を要するものと思われる。

1・2号住居跡　FI66・67区に於て検出。北及び西へ延びる。形状より推して2軒の重複と思われる。床面までは確認面より30～40cmほどである。（図版3－1）

3・4号住居跡　FL73・74区。床面までは15cmほどである。南東隅に粘土が散らばる。西側部分を近来の掘削により攪乱される。あるいは1軒の住居跡であるかもしれない。（図版3－2）

5号住居跡？　FI84区北側で、焼土、粘土を含む落ち込みがみられた。断面観察によると黒褐色土上面より掘り込まれている。あるいは、住居跡のカマドになるものかもしれない。

1号溝跡　FR71～74区所在。茶褐色土上面より底面まで約15cmと浅く、皿状に落ち込む溝で、巾約60cm。発掘区の東西ラインに対して西

側が北へ偏る方向で延びる。１号特殊遺構より古い。（図版４－１）

２号溝跡　ＦＬ～ＦＯ・８０～８７区に所在する。１号と比較して深く（茶褐色土上面より底面まで約５０cm）、巾広い（約１ｍ）溝跡である。１号の方向とは若干のずれがみられる。一部試掘の結果に拠れば、断面が「 ⌒ 」形を呈し、壁の立上りが、中段より外方へ開く。中段付近での巾約６０cm、底面までの深さ約１５cmと１号溝と近似する。方向のずれ、断面の違いがあるが、同一のものである可能性も充分ある。（図版４－２）

１号土坑　ＦＯ６７区。径８０cmほどの円形で、深さは約２０cm。

２号土坑　ＦＬ７３区。約７０cm×８０cmの隅丸方形。表土が混じっているので、新しいものかもしれない。

３号土坑　ＦＯ７６区。大形の方形土坑になるものか。南へ延びる。深さは約６０cm。

４号土坑　ＦＩ７３区の北東隅に於て検出。東西約１００cm、南北約１１０cmの方形を呈す。底面まで約５５cmを測る。フク土上層よりほぼ完形の須恵器坏が出土している。（図版１０－１）

５号土坑　ＦＩ７６区の北壁下検出。北へ延びる。表土が混じることから新しいものかもしれない。

６号土坑　ＦＪ８３区。東西約８０cm、南北約１００cmの長方形プランを持つ。フク土に焼土粒を多く含む。底面まで約５５cm。

７号土坑　ＦＩ８２区北東隅にて確認。北及び東へ延びる為、全体の形状は不明。方形土坑であろう。底面まで約５０cmを測る。

８号土坑　ＦＩ８３区南西隅にて検出。現状で、東西１８０cm、南北８０cmを測る方形プランを示す。確認面より約３０cm下に底面がある。小規模の住居

跡になる可能性もある。

1号特殊遺構　F I ～G A・7 3～7 7区に於て検出されたもので、発掘区の南北ラインに対して、北が西へ偏る方向で延びる。巾は約1.5～3mほどで一定しない。上面に固いブロックが入り、住居跡の床面同様にバリバリに固い。ボーリングの結果に拠れば、約10～40cmほど落ち込んでいる。これは、「道路敷」の様な施設と考えてよいのであろうか。（図版4－1）

b　出　土　遺　物

須恵器坏　底部に回転糸切り痕を有するもの少量が出土している。図版10—1は、4号土坑より出土したものである。

土師器坏　高台を有する坏（図版10—2）の他数点出土。

その他、須恵器カメ、土師器カメの破片が少量出土。

灰釉陶器　底部破片の他数点出土。内に、底部内面を硯に代用したと思われるものが2点ある。

平　　瓦　凸面に縄目の叩きが行われているものが最も多く、次いで格子目の叩きがある。

図版10—3は、凹面にヘラ先（？）で刻されたもので、一部欠失しているが、「大」と描かれているものと思われる。

他、丸瓦や軒丸瓦の破片が少量出土している。

V　総　　括

今回の試掘調査は、埋蔵文化財の種類、性格、分布などを目的に実施したがその結果を要約すると以下の様になる。

1. 先土器時代

この時代の遺構・遺物は調査前まで確認されていなかったが、今回立川ローム層中より遺物が2点出土したことは、この時代の遺構の存在が予想され、本調査ではさらに追求していく必要がある。

2. 縄文時代

遺物はこの時代のものが最も多く、ほぼ調査区全域において早期（撚糸文系）と中期（加曽利E式）を主体として、その他石器等も多く出土している。遺構は、土坑4基（時期不明）の存在が確認されたのみであるが、遺物の出土量よりみて多くの遺構があるものと思われる。

3. 奈良・平安時代

この時代の遺構は、竪穴住居跡4軒（あるいは6軒）、溝跡2条、特殊遺構（道路状のもの）1ケ所、土坑8基の存在が確認された。遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦等が出土している。

試掘調査の結果は、調査前にわれわれが予想していた各時代の遺構の存在を確認したものであった。

一方、先土器時代の遺物の出土は、われわれに大きな示唆を与えることとな

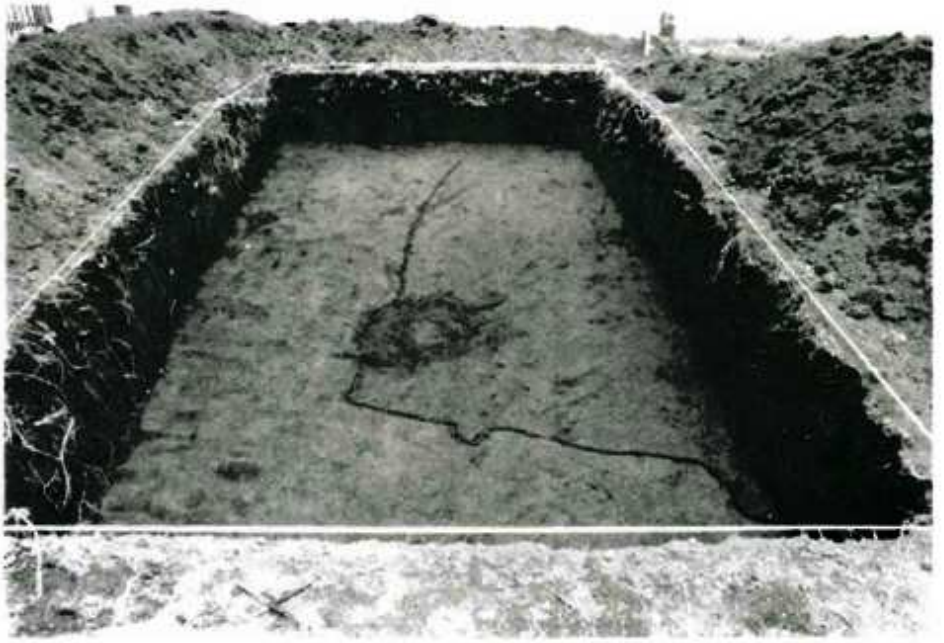
った。該地域に於ける今後の調査計画立案にあたって、先土器時代の調査の必要性を再認識させたことは、今回の調査の大きな成果といえる。

1. 発掘状況　東から

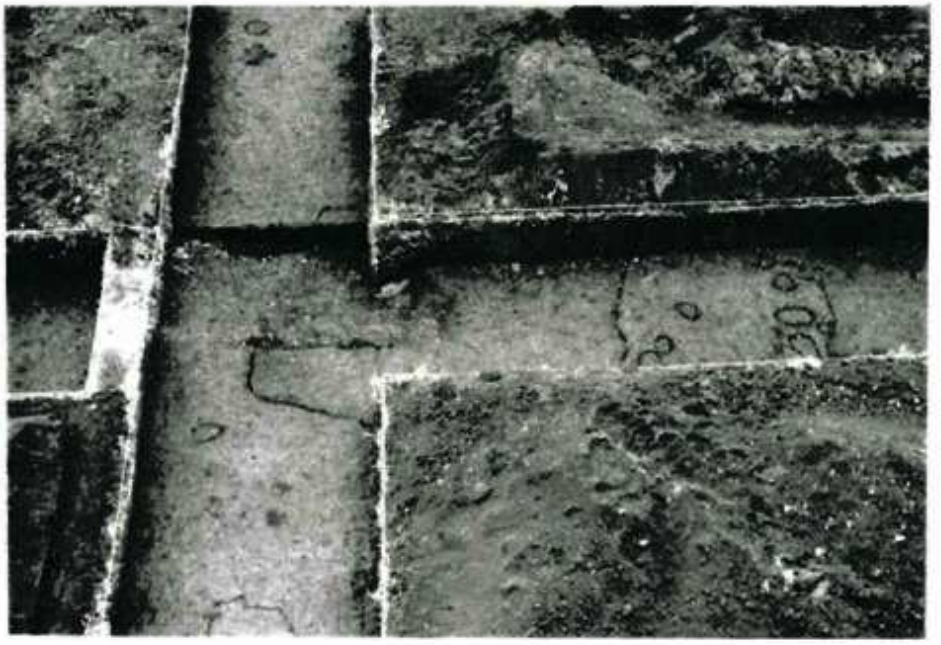
2. 発掘状況　南から

1. ＦＬ６６区西壁
七層断面

2. 発掘区全景　東から



1.　1・2号住居跡　東から

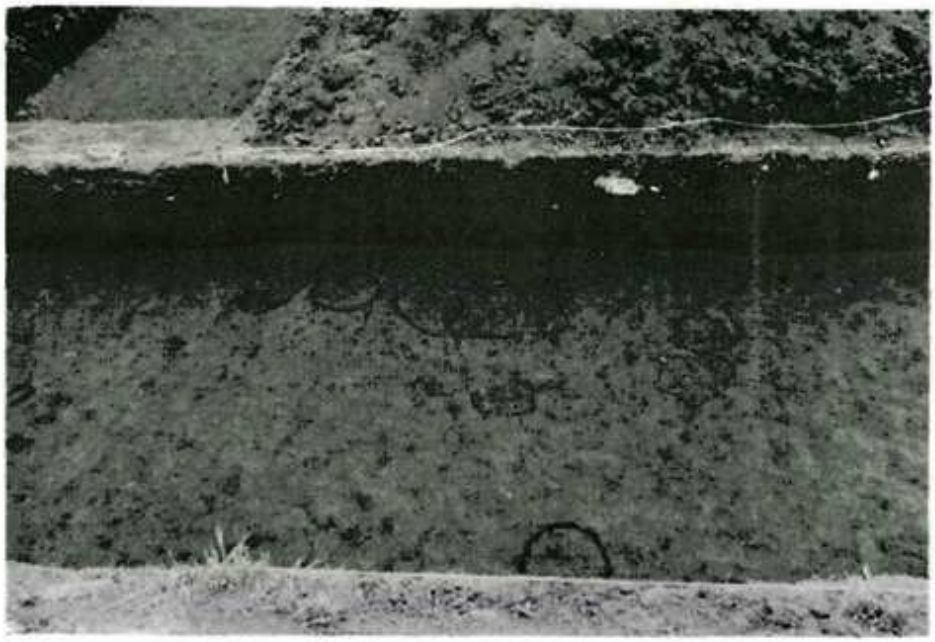


2.　3・4号住居跡　南から

1.　1号溝跡と1号特殊遺構　東から

2.　2号溝跡　東から

1. ＦＬ７３～７７　検出遺構　東から
（上より３・４号住居跡・１号特殊遺構・ピット群



2. ＦＪ８３検出遺構　東から
（中央）６号土坑

2. 縄文時代の遺物：土器

1. 先土器時代の遺物

図版 III

縄文時代の遺物：土器

4

3

2

1

縄文時代の遺物：石斧（1～4）

第八図版

3

1

4

2

2. 縄文時代の遺物：磨石（1・2），スタンプ状石器（3・4）

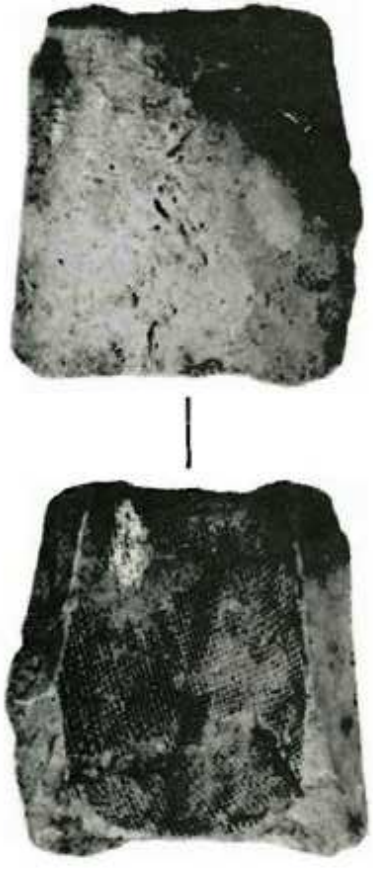
第九図版

1

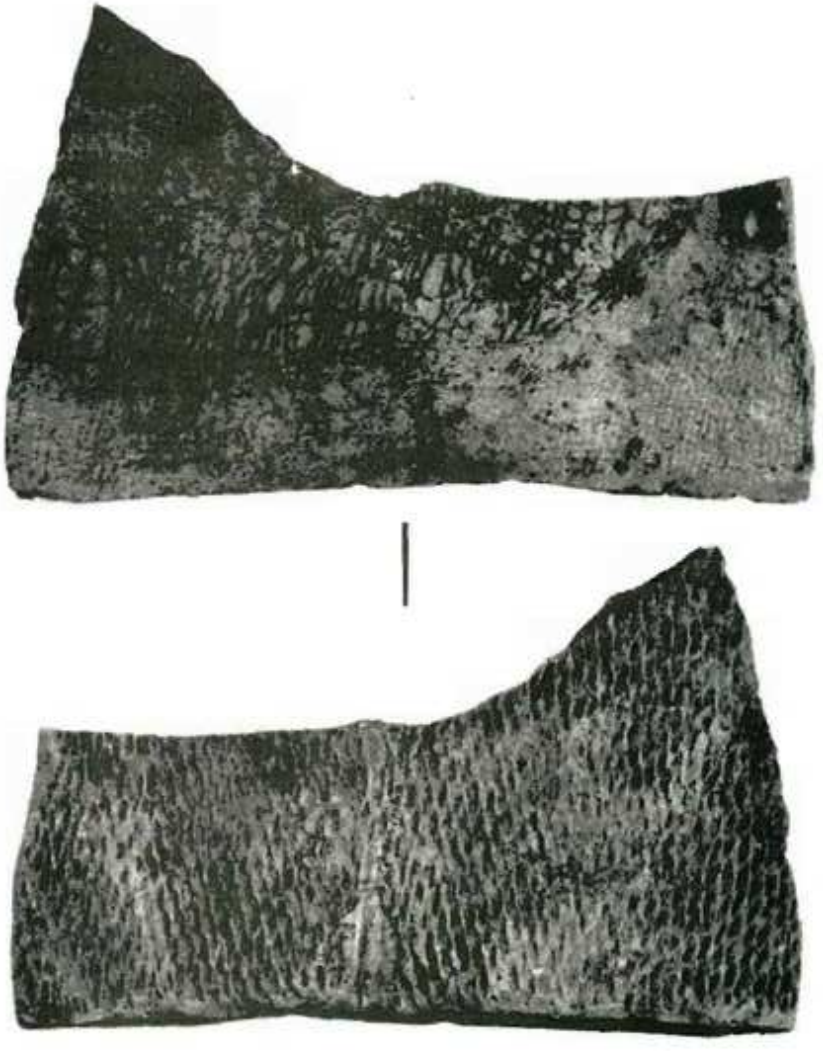
3

2

奈良・平安時代の遺物：須恵器坏(1)，土師器坏(2)，文字瓦「大」(3)



2



1

奈良・平安時代の遺物：平瓦(1)，丸瓦(2)

昭和51年6月30日 発行

武蔵国分寺遺跡発掘調査概報 I

㈱竹中工務店国分寺社員寮
建設予定地試掘調査報告書

編集　武蔵国分寺遺跡調査会
発行　国分寺市教育委員会
国分寺市戸倉1－6－1（〒185）
印刷　中研商事印刷部
国分寺市本町3－9－12

令和３年（2021）９月９日　デジタル版作成
底本はＢ５版。
図版は片面印刷のため、裏面の空白頁は省略した。